
テンプレートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話

ゼニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレチートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話

【Zコード】

Z0830Y

【作者名】

ゼニア

【あらすじ】

銀髪オッドアイで尚且つチート能力を強制的に持たされて転生させられた元一般人の物語。

この小説は神様転生、チート、オリ主の要素が出て来ます。

苦手な方は回れ右をして回れ左をしてください。

プロローグ

「……………ん？」

何もなく、見渡す限り真っ白な空間で一人の男が目を覚ます。

「あれ？ こ……ど……だ？」

男はキヨロキヨロと当たりを見回していると

「ふむ、ようやく気がついたか……」

そんな言葉と共に白いローブを着た老人が現れた。

..... side：謎の男

「あんた誰だよ？」

俺は突然現れた老人に問いかける。

「これ夢なのかなあ……」

「ワシは最高神じや」

ん？西光 進？

「ああ、全国水平社宣言の」

「それは西光 万吉じや、ワシは最高神じや、言わば全ての神の頂点に立つとる者じやな」

田の前の老人はそんな事を囁く。

「くっ、可哀想に……」の爺ちゃん、ボケちゃつてゐるね……！

「いや、ボケどちらんし、人を見た田と言動で判断すんなし」

何だ、正気なのか

「え？ こことはつまりガチなの？」

「うん、そう、ガチもガチ、大ガチじやよ」

そんな馬鹿な……！

「な、なななな何で神様がいらっしゃるんで？ ジヤニコヤスでゲスか！」

「落ち着け、驚き過ぎて血葉が変じや」

ま、まあまあ、と、取り敢えず落ち着く。

すーはー、すーはー。

よし。

「落ちついたな？」

では話そつ、お主がここにいる理由などをな

神様説明中 . . .

- - - - - - - - - -

「つまり俺は死んだ、と」

「つむ、そうじゅ、下級神が誤ってお主を殺しての、偶々ワシが下界を覗いていたから良かつたものの、お主を殺した下級神はバレていないとthoughtのか、誤つて殺した事を隠蔽しようとしておつたから」

ひでえ、神様が殺しを隠蔽とか……

「じやからその神には電気アンマ8時間の刑にしておいた」

「地味に辛い」

「ちなみにその下級神、女神ね」

らめええええ！？

「正直その女神を見に行きたいが、我慢して、結局俺はどうなるの？」

「スジヤからな、お主には転生してもいいぞー」

「おおー！？ 来た、転生！」

「異論は無さそじやな、では今からワシが言つ条件と世界をどうか一つ選んでくれ」

1・子供魔法先生がいる世界へ行く、容姿は銀髪オッドアイ+チート能力。

2・ゾンビで溢れかえった世界の日本に転生する、容姿は銀髪オッドアイ+チート能力。

3・女性しか乗れない兵器がある世界に転生する、容姿は銀髪オッドアイ+チート能力。

4・何の不思議な事もない世界、かと思ひきや悪の秘密結社とかいる世界に転生する、容姿は銀髪オッドアイ+チート能力

5・本気で何もない平凡な世界に転生する、容姿は銀髪オッドアイ。

「はっはっはっ、おいおいおい」

銀髪オッドアイ+チート能力で。

「どこのヒンプレチートオリ主だよー？」

「『仮に』ことの？」

「『仮に』いりやわ！？

せめて銀髪オッドアイとかいや過激いわ！」

銀髪オッドアイとかいや過激いわ！」

「残念じゃが無理じゃ」

何で！？

「『仮に』なんテンプレチートオリ主になるな！」のまま死んだ方がいい
よー。」「どうしても嫌なのかの？」

「やだよーー！」

断固拒否する！

「しかたないの……」

諦めてくれたのかな？

「なら、無理矢理じやああああーーーー！」

じこわんがそう叫んだ瞬間、足下に穴が開き、落ちた、俺が。

「まさかの強制いいいい！？」

「こんのクソジジイいいい！」

「…………」

第1話 転生

どうも、皆さん。

俺の名前は『如月』
『煉夜』

え？ 誰つて？

プロローグにいた謎の男だよ。

あのクソジジイに強制的に転生させられて、七年ほど立っています。

キングクリムゾンだが、赤ん坊時代の事を話してもしょうがないしね。

それはそうと、あの駄神ガチで銀髪オッドアイに転生させてくれやがりました。

信じられないだろ？ 日本人なんだぜ……俺。

ちなみに転生直後の回想……

- - - - -

『無事転生出来たみたいじゃの』

『おー、クソジジイ！
ふざけんなよ！…？』

銀髪オッドアイなんかにしゃがつて！

どうせ銀髪オッドアイならラグナに憑依転生とかしたかったわ！

『あれあれ？ 最高神のワシにそんな事いつていいのかの？ ぐだすよ？ 天罰』

『やれるものならやつてみるよ』

『運がよかつたの、MPが足りないみたいじゃ』

『死ねよ』

『ギャグつてんじゃねえよ……

『まあまあ、そう怒るな、転生してしまったモノは仕方ないじゃろ』

アンタが強制的に転生させたんじゃねえか

『四の五の言つでない、では今からお主の能力を教えよつ』

えらく唐突だな。

しかし能力か……まあチート能力なんだらうね。

『お主の能力は以下の通りじゃ』

1・界王拳

2・サイヤ人並みの気

3・SSS級魔力

4・ニコボ

5・ナデポ

『あ。あと、お主がおる世界はリリカルでマジカルな魔法少女の世界じゃからな』

『おかしいだろ！？

何だよ、界王拳って！？

公式チート能力持つてくんないよ！？

それにサイヤ人並みの氣ってどの位だよ！？

いや、それ以前にニコボとナデポはいらねえー』

『ほつほつほ、安心せい、界王拳は今のお主でも5倍まで耐えられるからの』

『そういう事を言つてんじゃ……』

『じゃ、そういう事で』

そういう、じいさんの言葉は途切れた。

『え、ちよ……』

マジで?』

- - - - - - - -

回想終了。

正直、SSS級魔力だけでよかつた……

そして、二コポとナデポは本当にいらない……

てかあまりにも能力が濃かつたからスルーだったが、リリカルなのは世界つてのもおかしいよね。

確かに、あのじいさんが選べって言つてた世界つてさ

1はネギま

2はおそらく学園黙示録

3はインフィニット・ストラトス

4は秘密結社とか言つてたから仮面ライダーとかかな

5は普通の世界

……リリカルなのはは選択肢になかつたじやん……

適當すぎだら、じいちゃん……

まあ、もつ半ば諦めてるけど。

あれだな唯一の救いは俺の両親が銀髪オッドアイつていう明かに異常な俺を氣味悪がつたりせずにはちゃんと育ってくれてる事だな。

ありがとう、母さん、父さん。

そして、二コポとかふざけた能力のせいで笑えなくてすんません。

さて、能力の事だが。

まず界王拳、赤ん坊の時から5倍とか出来る時点で薄々気づいてたけど、成長に連れてわりに倍で出来るようになった。

現在8倍まで出来るようだ。

これ、悟空みたいな修行したらどうなるんだろうね。

次にサイヤ人並みの気ってのはどうやら、悟空とかベジータ並みの気を持つてるようだ。

しかし、サイヤ人じゃないから気を100%フルには使えないみたい。

いや、正直クリリン、いやヤムチャ並みの気でもかなりチートだけね?

夢のかめはめ波が撃てるのかな……

次にSSS級魔力、これがある意味普通。

よくある感じのチート能力だよね

取り敢えずデバイスとか無いわけだから使い方がよく分からんがりンカーノアがあるのは感じられた。

んで最後はニコポ、ナデポと……

何でこんなハーレム作るぜ!みたいな最低系の能力なんだろ。

ニコポのせいで俺、アレだよ? 無口無表情で何時も隠っこで本呼

んでる長門さんみたいポジションになってるんだよ？

唐突なアクシデントで笑いそうになつた時とかマジ困る、必死で顔隠さんとヤバいからな……

一回二コポを偶々いた猫さんにやつてみた事があるんだが、凄いなつかれた。

どんなに引き離そうとついてくるから、界王拳使って逃げたのに俺の事追いかけて来たからな。

お陰で今は我が家の家族です。

ナデポは言わずもがな、二コポが猫に対してもはあるが威力が絶大だつたからナデポとか出来ねえ、てか初対面の人を撫でよつとかしたら変態だよ。

この一つの能力は正直どうにかせんとヤバい。

将来的にもしも子供が出来たりしたら、俺自分の子供に笑いかけたり撫でたり出来ねえじゃん……

親に本気で惚れる子供とか薄い本だけでいいよ。

しかも厄介なのが男に対しても効果あるってのがダメだよなあ……

何とかしないと、ウホツな展開に……

止めよつ……

想像したら氣分が……

ま、まあまあ、うん、とにかく、こんな感じで俺の第一の人生が始
まつたのでした。

主人公紹介

【如月 煉夜】
きずなつき れんや

神様に強制的に銀髪オッドアイのテンプレートオリ主にさせられた元一般人。

鏡を見るたびに毎回〇・△・□になる。

だがかなりのイケメンではある。

最近、名前もオリ主っぽい気がするんだけど……と更にネガティブつている。

能力は界王拳、馬鹿みたいに高い気、今から数年後のはさん並みの魔力、ニコポ、ナデポ。

界王拳は最初から使える。

気は練習中、しかし、界王拳が使えるためにすぐに扱えるかもしれない。

魔力は扱い方が分からぬ、正直氣だけでもいいんぢゃね?と思つてゐる。

ニコボのせいで社交性皆無の男の子になってしまった。

しかも、銀髪オッドアイというのもあってか友達がない。

しかし、内心でははつちやけ倒したくて仕方がない。

人がいる前で笑えない分、家の自室で思う存分笑っている。

能力を完全に使いこなせるように頑張っているが、ニコボのせいで原作に入れるかどうか悩んでいる。

「これも全てニコボって奴の仕業なんだ」

「なんだって、それは本當かい？」

第2話 なのはちゅんはいい子だねえ

やあ、みんな、如月だよ

田と田が逢う

ごめん、何でもない。

只今俺は

「ねえねえ、如月くん、なに読んでるの？」

原作キャラに絡まれてます。

あ、ちなみに今学校ね。

因果的な何かがあるのか俺は私立聖祥大附属小学校に入学した。

そう、今俺に絡んでる原作キャラとは、『高町なのは

主人公だった。

何故かは分からぬが、入学してから段々孤立して誰も俺に話しかけて来なくなつたのに、なのはさんだけが度々俺に話しかけてくるのです。

何故だ。

「口つもした」とないから、「ボの呪いを受けた訳じゃないはずなのに……」

「あつち行け」

俺はなのはさんに冷たく言つ。

その言葉でなのはさんは悲しそうな顔をする。

ごめんねええええ！――――――

「こんな事言つて本当マジ!」めんねえええ!ーーー

でも孤立した俺に話しかけてくれる優しさに顔がニヤけそうになる
からあああ！！

正直二コポつてどういう笑い方でポツてなるのかわからんから一ヤ
リとも出来ねえんだよ!

「ちよっとあんた！ なのはがせつかべ話しかけてるのに向でそんな事言つのよ！」

『アリサ・バーニングス』さん怒鳴りながら登場。

アリサさんの怒りはいつもと modulus、俺も俺自身に怒鳴りつけたい、いやむしろあのジジイを怒鳴りつけたい。

「だ、ダメだよアリサちゃん、私は氣にしてないから、ね？ 行こー！」

と、なのせあんせアリサさんの腕を引きながら行つてしましました。

「うふ、なのはー？ まだ話が……」

「めんなさい、心の中で上座します。いやむしろ下座します。

ダメだと叫ぶならヤムチャ寝します。

爆発してから。

「ちよっとなのは、びひじて止めるのよー。」

アリサがなのはに聞ひ。

「アリサちゃん、落ち着いて」

怒っているアリサを『月村　すずか』がなだめる。

「大丈夫よ、すずか、私は常に落ち着いてるわ」

アリサの言葉に「そうかなあ……？」と疑問に思ひすずかだが口には出さない。

「ていうか、なのははどうしてアイツに構うの？　ほとんど喋らないし、何時も無表情で本読んでるし、はつきり言って根暗よね。」

ズバッと言つアリサ、本人が聞いていたら心の中で泣いてそうだ。

「……如月くんはね、何時も寂しそうな顔をしてるの」

なのはが喋り出す。

「男の子達が漫画やアニメの話をしてる時に話に加わりたそつこしてこるし、お弁当食べる時も誰かと一緒に食べたそつこしているの」

その時の煉夜。

【少年達の話】

（「うおおおおーーあの少年達、ドラゴンボールの話してるじゃねえかよー！」

この世界にもドラゴンボールあるのかよー？

やべえ、話に加わりてえ……！
ネタバレしてえ……！

【昼食】

(寂しい。

俺以外みんな、グループ作つてんのに俺だけポツリと……
くつ、給食だつたら強制班になるのに……

まあ、班になつても俺に話かけてくる奴はいないだろうナビ……

やべえ、目から汁が出そつだ

「それで、お友達になりたいな、つて」

「話はわかつたけど、あんたよく見てるわね
まさかアイツの事……」

「ひやつ！？ ち、違うよ～！」

アリサの妙な勘違いに手をパタパタと振り乱すのは。

「まあ、取り敢えずそういう事なら私達も手伝ひや、ねつ、すすか

「うん、私達も頑張る

「二人ともありがと～！」

「つー?何か俺の知らない所で変なことになつてそ
うな氣配が.....!
なるほど、コレが氣を感じると言ひつけとか

違います。

第3話 もの? (繪書き)

次の話からキングクリムゾンになると題こます。

第3話 ……あるえ？

「如月くん、一緒に弁当食べよー。」

「屋上に行くから来なさい。」

「みんなで食べた方が美味しいよ

上から、なのはさん、アリサさん、すずかさん。

あるえー？ 何でこんな事になつてんの？

何で昨日より好感度上がつてんの？

まさか、昨日、界王拳の練習で調子に乗つて9倍にしたからこんな事に……？

いや、絶対ないわ。

てか筋肉痛半端ないッス。

補正的なものがあるからこの程度ですんでるんだよね。

何かじめんね、悟空。

それはそうと、この状況だよね。

正直嬉しいけど

「一人で食べるからいい」

一緒に弁当何て食つたら幸せ過ぎて一ヤケナシまつよ……

「そんな事言わないで行こ！ ね？」

なのはさんがずっと顔を近づけてくる。

らめえええ！ そんな期待の籠もつた目でみないで！

「い、いじってるだろ……

お、俺は一人で食べるから……」

〔屋上〕

「いただきまーす

嬉しそうにお弁当を食べ始めるなのはさん。

どうしてこうなった？

今日のなのはさん何時も以上に食い下がつて来て、それでも断つてた俺に業を煮やしたのか、アリサさんに首根っこ掘まれて屋上に強制的に連れてこられました。

何か強制つてのに縁があるのかな、俺。

「全く、アンタのせいでの、時間ギリギリになるじゃない」

「まあまあ、アリサちゃん

……………それで、ここまで来ちまつた以上、もう逃げられないぜ？
俺が。

本氣出して、無表情にならねばならん……

だけど、嬉しくて、自然と笑みが出来やつだよおつかさん……！

「どうしたの？　如月くん。
変な顔して……」

「はつー？　なのせさん見てられた！」

「やけそな顔を必死に隠して無表情にしようとしてる顔がつ！」

一ヤケと無表情の中間みたいな顔つて凄い変だよね。

「い、いや、何でもない」

このつねれば、弁当を食べじとに集中して、周りを気にかけない事に
しよい。

「ねえねえ、如月くん」

（パクパク）

如月くん？

(#C7E7E7) 「.....」

一
あらわし

アボガド

「うーん？」

「無視してんじゃないわよ！」

な、なんだ！？ 何が起こった！？

弁当に集中してたら横腹に衝撃が走った……

周りを見ると、ちょっと寐田ななはさんと毛が逆立ちそうな勢いでキレてるアリサさん、そしてアリサさんをなだめるすみかさん。

なんか俺が思い描く事と全く違う事が起こりますがじやね?

「やつぱり、迷惑だつたかな……

如月くん

不安げな表情で聞いてくるのはむん。

「うーは、迷惑だと言つた方が俺に関わらなくなるんじゃなかろうか……

……

「口ボト傷つ厄介な物を何とかせんと危険だもんなあ……

やはつ、うーは……

「め、迷惑」

「つー?」

「じゃない」

あれ？

あ、あいつのまま今起じつた事を話すぜー。

『迷惑で止めよ!と思つたひ「じゃない」をつけてしまつていた…』

…』

何を言つてこらかわからねーと思つが俺も何が起じつたのかわから
い…

頭がどうにかなりそうだった…

もつとも恐ろしこモノの片鱗を味わつたぜ…

いや、や。

あんな泣きそう顔見て、冷たく言い放つ事なんて出来なかつた…

ちなみにして

【頭がどうにかなりそうだった】

アリサの殺されそなぐらーの鋭い眼光を向けられて。

【もつとも恐ろしこモノの片鱗】

すずかの黒い笑み。

「ほんと?」

「ほ、本当」

ヤバい、ヤバい。

なのはさんの涙田上田使いが可愛いすぎて世界がヤバい。

「じゃあ、お友達になってくれる?」

「うそ、なる

.....。

あ、あいつのまま今起ひつた事を（ry

なのはさんは魔性の女だったようです。

なのはさんの言ひ事は何でも聞いて上げたくなってしまつ.....！

友達承認しちまつたよー!?

「本当ー?」

パアツと表情が明るくなるなのはさん。

ふ、ふふ.....

負けたよ.....

きっとコレから無表情を貫き通してストレスがたまる生活が開始さ

れるのだろう……

それでもいいかなって自分がいて怖い。

第4話 瞬間移動

なのはさん達と友達になつてから結構月日が立ちました。

俺、三年生。

原作開始まで秒読みだねつ！

そして、誰でもいいから俺をほめて！

今なお、無表情を貫き通している、俺をほめて！！

いやあ、友達になつた日から頻繁に四人でつるんでるだけじゃ、そろそろ限界。

何時も無表情な俺を笑わそうつて変な企画が出てきた時はもう『ゲームしてもいいよね、みたいな感じだつた。

俺に忍耐力が結構あつた事に驚きですよ。

あ、ちなみに界王拳が10倍まで耐えられるようになつた。

成長するだけで倍数が増えるつて……

何か本当じめん、悟空。

キー・パー・カーン・パー

おつと、学校終了のチャイムがなつたな。

わい、じゅ、帰

「レンヤ君、一緒に帰ろー。」

わいとしたらのはさんで捕まつたで』『わい。

ちなみになのはさんは結構前から俺の事を『如月くん』から『レンヤくん』に呼び方がグレードアップしています

そして、なのはさんの後ろに立つやうなことをこの時
ものメンバー

しかし、今日は

「用事があるから一緒に帰れない」

ので一人で下校します。

「あ、そなんだ」

『めさね、なのはさん。

来るべき原作開始に備えて、修行するよ。

と、言つわけで来ました。

人気の無むさうな上じ。

といあえず、アレだ、原作開始に備えて、なのはさんの砲撃に対抗できる攻撃を編み出せり。

まあ、対抗するといつてもなのはわざと敵対するわけじゃないナビ。

てこいつが、あの砲撃に対抗する「はピッタリ」の技あるよね。

かめはめ波だよね。

オリジナリティなくして「みんなちー

ぶつかやけるといつて数年、氣の練習してこれは誰の氣かつていつのは分かるようになつたりはしたんだけど、氣の放出をした事はないんだよね。

まあ、とにかく一度やってみる。

「よし……

か、め、は、め

「波つ……」

ポヒュウ……

「何が出た」

スッゴいシケてたけど、かめはめ波できたな……

うん、取り敢えず出来たつて事は氣の放出の仕方を色々ためせば、
かめはめ波出せるはず！

「かめはめ、波つ！」

ボウ！

「かめはめ、波あ！」

ドォン！

「かあああめえええ（若本風に）」

バチツバチバチ……！

「はあああめええ（若本風に）」

בְּלֹא בָּלָעַת

「ふるわああああーーー！」

ズドオオオオオ！！！！

「アーティストの本」

漫画みたいにしつかりしたかめはめ波が出たけど何で若本風で一番
ちゃんとしたのが出たんだ……？

「普通に出せるよつにならんと、セルのかめはめ波みたいになつてしまいそうだ……」

۷۰

逃げよう。

空に撃つたとは言え光の柱が昇つて行つたのを見た人が来るかもしれないし。

よし、I-Jは瞬間移動で……

「…………」

ピッ

額に人差し指と中指を当てる。

悟空の瞬間移動ポーズだな。

「ムカシ母さんの氣だな…………」

ピックンー

・・・

・・・・・

・・・・・・・

「つて出来たらここのにねえ」

瞬間移動は流石にまだ無理だぜ。

ところが母さんは俺がこんな事出来るのを知らないから、母さんの所に瞬間移動とかしないわ

さて、ふざけてないで移動しようつか……

第5話 原作開始

『助けて』

！？

これは……

ユーノくんとうとう来たか……

「今、何か聞こえなかつた？」

なのはさんがあいつ。

ちなみに今日は一緒に下校中でした。

「何か？」

すずかさんが首を傾げる。

「何か声みたいな……」

「別に……」

「『やよいづなら、天さん、どうか死なないで』くらじしか……」

「それ、聞いたのー？」

「ていうか、あんたが[冗談]したの初めて聞いたんだけど……」

「ういや、いつも冗談とかネタは心の中で言つてたんだった……

『助けてー』

「……やっぱり聞こえたー。」

やつまつてなのはやんは駆けていきました。

ヒツヒツ、原作開始があ……

どひじょひ、俺、舞空術昨日覚えたばっかり何だけど……

いや、別にいいか。

なのはやんを追いかけてフローレットっぽい、生き物を発見。

「怪我してゐる……」

「取り敢えず獣医やんに見せよつ

「へ、うんー。」

で、結局ユーノくんの怪我はそんなに大した事もなく、獣医さんに預けてみんな家に帰りました、と。

今田の夜かなのはさんが魔法少女になるのは……

んー、まあ、うん。

取り敢えず、再びユーノくんの声が聞こえるまで寝てようかな……

『…………《聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？》』

再び、声が響く。

「亀岡の声と同じ声……」
なのはが声に反応する。

『聞いてください

僕の声が聞こえるあなた、お願いです！
僕に少しだけ力を貸してください！』

「あの子が喋つてるの？」

そして、なのはは面間助けたフレレットの下へと行くのだった。

【その頃の如月くん】

『聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？』

「ううん……ブルータス、お前もか……ムニャムニャ」

見事に夢の中だった。

しかも変な夢を見ている。

『聞いてください

僕の声が聞こえるあなた、お願ひです！
僕に少しだけ力を貸してください！』

「ん……オラに、元、気を……分けて、くれえ……」

今度は元気玉を作っているのだろうか。

そして、そのまま朝を迎えるのだった。

- - - - - - - -

チュン、チュンチュン！

「小鳥のさえずりが朝だと知らせる……」

ふう……

普通に寝過ごししたぜ

まあ、いいか。
何とかなるでしょ。

取り敢えず、学校へ行こうか。

学校へ行くと、なのはさんがフューレットを飼つておいたところ話を聞いた。

なのはさんは無事、魔法少女リリカルなのはランクアップしたようですね。

授業中はなのはさんとユーハーさんと話をしているんだもつなか、とか思いながら、一日を過ごしてきました。

で。

・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・

「それを渡して下さー。」

こいつなる。

どうして、こうなったんだが……

えーと、確か……

学校が終わって、いつものような感じで皆と下校して、家に帰り、ブルータス（ニコポ被害にあった猫、メス1話参照）が外でニャーニャー言つてるから何かと思つて見てみたら

くわえてた。

何をつて？

宝石種。

何か違う気がするがまあいいだろ？

いや、ビビったね、ブルータス（猫）がまさかジュエルシードくわえてるとかね。

慌てて取り上げたよ

ジュエルシードが発動しちまつたらヤバいからね

まあ、ブルータスは願いが無いのか知らんが発動しなくて良かつた。

んで、もし発動してもいかんから急いでこの間、かめはめ波の練習をした山に来た。

そしたらね、みんな大好き『フェイト・テスター・サ』さんが現れました。

アルフさんを連れて。

正直ジュエルシードはフラグかもと思ったんだが、ガチだった。

どうしよ？……

初めて会う魔法少女がフェイトさんとか想定外だった……

第6話 なんかよく分からぬ内に初戦闘（前書き）

私「如月くんのオーディオって何色と何色なの？」

煉夜「ん？ 緑色と紫色

紫色とか……ラムダでもいる感じやねえのって感じだよね……」

第6話 なんかよく分からぬ内に初戦闘

「これは危険な物だぞ？ 分かっているのか？」

フュイトさんに言つてみる。

「…………」

「いいから渡しな！」

フュイトさんにだんまり決め込まれました。

お兄さん泣きそづ。

あ、 同い年か。

アルフさんがグルルルと唸ります。

はつきり言つて怖いです。

これを危険な物とか言わなければ一般人として接してくれたかも
しないね、失敗した(・_ゝ)

「た……」

「？」

「タツカラプト・ポツポルンガ・ブピリット・パロ！！」

「は?
あんた、何言つて
」

俺も一体何を言っているのk

הנִזְקָנָה

「な!?」

いきなり俺が持つていたジュエルシードが発光しながら震えだす。

何だ？何だ！？

俺は慌ててジユエルシードを放り投げる。

.....גַּדְעָן.....גַּדְעָן.....גַּדְעָן.....

何かいきなり空が暗くなつて雷とか鳴り出したんだが。

バシュウウウウー！！

そして、ジュエルシードから光が昇り……

『私を呼ぶ者は誰だ……？』

何か出てきた。

「な、なんだいコレは！？
あ、あんた何したのヤー！？」

「ジュエルシードは実はナメック星のドラゴンボールだったって新たな説が生まれたな」

慌てるアルフさんに言ひ俺。

まさか、ナメックの合い言葉でジュエルシードからポルンガ出てくるとか完全に予想外だわ、しかも一個だけで出て来るとかドラゴンボール涙目。

まあ、ポルンガに似てるの顔だけだがな。

動体とか龍つてか竜だし。

足あるし。

そして、俺はテンパり過ぎて逆に冷静になつてゐる。

ヤバい、俺の余計な一言でどんどん混沌になつていへ……！

《さあ、願いを言へ》

え、願い叶えてくれるのー？

「ね、願い？」

フロイトさんが放心した感じで言へ。

そうだよね、いきなりこんな出て来たら誰でも驚くよね。

だが、願いを叶えてくれるなら好都合だ。

今こそ俺の願いを……！

「俺の二コボ、ナドボをどうにかしてくれー！」

本当に願いが叶うなら俺は外で存分に笑えるー。

《それが願いか……》

いいだろ？、叶えてやる？…… ただし

ん？ ただし？

『私を倒す事が出来たらなーー』

「どうこう」とだぜ

よく分からぬ内に戦闘が開始し、10分くらいたちました。

『ちょこまかと！ー』

ポルンガ（仮）の口から火球が放たれます。

「界王拳3倍ーー」

それを界王拳の倍率を上げてかわします。

実はさつきからこんな感じで逃げ回ります。

え？ だらしねえな？

はつはつはつ、よく考えてくれよ、確かに界王拳とか氣とか扱えるけどさ、これまで普通の小学生だつたんだぜ？

そんな奴が戦闘訓練とかすつ飛ばしていきなり実戦出来ると思ひつ？

まあ、そんな事言つて逃げ回るだけでは何も始まらないから、覚悟決めようか。

あ、ちなみにフェイトさん達は放心してるフェイトさんをアルフさんが人型にトランスフォームして抱えてじっかいきました。

丸投げとか。

『ねん！』

ポルンガ（仮）は尻尾を振るい、俺に迫る。

「4倍……」

それを確実に物理法則を無視した動きでかわし、ポルンガ（仮）の背後に回る。

界王拳つて色々凄いよね。

「く、ひえ！ 完全に界王拳頼りの蹴り！！ 8倍…！」

『ぬつ！？ グオオオオ！？』

ズドオオオオン…………！

いやあ、スッゴい吹っ飛んで行ったよ。

界王拳スゲエ。

『おのれ、こしゃくな！』

あれで決まるとは思つてはないけど、そこまでダメージはなかつた
っぽい。

ならばアレで決める…！

俺は両手を右腹辺りに持つて行き気を溜める。

「か、め、は、め……」

俺の構えを見て、ポルンガ（仮）が身構える。

「波つ！！ とでも思つたか！！」

かめはめ波を撃たずにポルンガ（仮）の眼前へとかつ飛び拳を振りかぶる。

『ふははは！！ 飛んで火にいる夏の虫だ！！』

ポルンガ（仮）は俺めがけ火球を放つ。

俺は迫り来る火球にぶち当たつた……りはせず、火球は俺をすり抜けどこかに飛んで行つた

『何！？』

「残像だ」

ポルンガ（仮）の真横に現れ

「波あああ！！」

先ほど溜めたいた、かめはめ波を放つた。

うーん。

能力チートだけかと思つたら、思いの他ボディもチートだったっぽ

い、残像拳出来るとかマジ胸熱。

『よくもやつてくれたな……』

さて、このポルンガ（仮）はどうつかな……

8倍界王拳かめはめ波は大分効いたみたいで地面に倒れてるんだが

……

「勝つた……よな？

本当に願いを叶えてくれるのか？」

『ああ……

私に勝ったのだ、願いは叶えてやるわ』

マジか、マジなのか……！

「じゅ、じゅあ、せつきも言つたよつて、俺の一二コボとナドボをどうにかしてくれーー！」

『……』

わくわく

『……』

ドキドキ

『……………』

な、何だ？

もう願い叶った？

『残念だがその願いは神の力を大きく超えていい。
叶える事は不可能だ』

「なん……だと？」

そん、な……

ば、バカな……

はつー？ そうか……

この二コポ、ナデポを『えてくれやがつたあのじこせん……

最高神つて言つてたよな……

つまり、このポルンガ（仮）の言つている神が下級神だろうが中級
神だろうが上級神だろうが、そのさらに上に行く最高神の力を超え
ない限りジュエルシードで願いは叶わないって事？

くわあ……半端に頑立ちやがつて……

何が最高だよ再婚しのマリああああーーー

ふう、ちゅうと落ちついつか……

《別の願いにするか?》

「保留つて出来る?

他の願いが決まった時にまた喚びたいんだが

《いいだらう……

では、そりまだ!》

そう言って、ポルンガ(仮)は光を発し、収まつた時には封印状態になつたジュエルシードに戻つていた。

残念だが……

まあ、何とかなるぞ!

うん、多分ーー!

最近、無表情にもちよつと慣れてきたるしねー。

大丈夫、大丈**b**

ガサガサつー！

ふおひー！？

な、何だ？

動物k

「レンヤ、くん……？」

「な、なのは……さん？」

なのははたん遊場あおー！？

え、まさか見られてた？

い、いやそんな事は……

「！」あんね、レンヤくん
ずっと見てたの……

わうわの……何？」

\(^o^)/

界王拳（その他諸々）バレた！

第7話 オハナシ（前書き）

例えばさ、もう自分（如月くん）の事を好きな子には一コポ、ナーテ
ポは効きませんみたいのはどうだらう。

第7話 オハナシ

- 数分前 -

„גַּדְלֵנָהּ גַּדְלֵנָהּ גַּדְלֵנָהּ

「ふええ！？ な、なになに！？」 何でいきなり暗く…………！ も、もしかして……」

「なのは！ ジュエルシードだー！」

いきなり暗くなつた空に驚くのはユーノが叫ぶ。

一
サリハニシ

なのははジユエルシードの下へと走りだしたのだつた。

「あぐれだよ、なのせー。」

¶ { } { } ! !

『』

ジユノルシードに近づくつれ、物音や喋り声が聞こえてくる。

「誰かいる……？」

なのはは走のを止め、ゆっくりと近付き物音の方を見る。

『ねん……』

『4倍……』

そこにいたのは、どこかで見たような顔をしている大きな竜と戦つている、なのはのよく知る友達だった。

「う、嘘、レンヤ、くん？」

「あ、あの子は一体……
なのはの知り合いなの？」

ユーノが驚きながらなのはに聞く。

「う、うん、赤いオーラ？　みたいなのがてるけど、レンヤくんだよ、私の大切な友達」

なのはが答える。

ちなみに赤いオーラといつのは界王拳を発動したら出るアレである。

『へりえ！　完全に界王拳頼りの蹴り！！　8倍！！』

『ぬつ！？ グオオオオ！？』

煉夜の蹴りで竜が吹き飛んで行く。

それを見たなのは

「界……王拳……？」

今、界王拳って言つた！？

目を丸くしながら驚き

「嘘、あれつて……」

『か、め、は、め……』

「…………」「（ドキドキ）

かめはめ波を期待するなのは。

『波つ！？ とでも思つたか！？』

だが煉夜は撃たずに竜の眼前へと飛ぶ。

「や、やつぱり、そつだよね……」

流石に撃てないか、とちょっとガツカリするなのは。

『何ー?』

『残像だ』

『波あああーー!』

「え、残像拳なのー? カメはめ波なのーー! ?

立て続けに驚愕するなのは。

それにしても女の子なのに技をよく知っているものである。

「あ、あれは、魔法?

い、いや、魔力じゃない……

な、何だアレ?」

『氣です。

ーーーと、言つようにのは結構前から見ていたのだった。

「つまり、カクカクシカジカシカクイムーブって訳なんだ

俺はなのはさんにポルンガ(仮)が現れたいきさつを話した。

「え、えっと、それより何でドラゴンボールの技が使えるのか知りたいの」

それより!? それよつつけたよ!?

ジュノルシードエー……

れど、どうしたものか……

「え、えっと、界王拳自体は生まれた頃から使ってたんだ、かめはめ波とかは、しゅ、修行? そう修行」

修行らしい修行なんかせずに習得しちゃったけど。

「…………」

「な、なのはさん?」

え、だんまり?

こ、怖い、凄く怖い!

まさかOHANASエフラグ?

「す

す?

「あーこー… あーこー…」

え？

何が？

「界王拳やかめはめ波が使える何てすげーのーー！」

そうか……

そうだよね、全く知らない技とかならまだしも、この世界ドリゴンボーリ存在するもんな、かめはめ波とか使えたたらある意味英雄みたいな感じかもしねない。

ていうか、目をキラキラさせてるなのはさん可愛い。

「生まれた頃から使えるって……
レアスキル……なのかな……？」

足下で呟くユーノくん

そう言えばいたんだつた。

身体能力やら何やらを耐えれる限り倍々に出来るレアスキルとか管理局に目つけられたりしないよな？

俺、界王拳を100倍まで上げる事が出来たらハンドレットパワーにするんだ。

「あ、やうこ『ば』

なのはさんかが思つ出したよつてこいつ

何でしょ「」

「」「」
「」
「」

そ れ か ！ ！

や ヤ ヴ ハ

どつ説明すれば

「え、えと……

く、癖？ やう……癖だよ……」

「クセ？」

小首を傾げるなのはさん

「やう、癖だよ、困った癖でね、やう……」

「？ いきなり後ろ向いてしゃべったの？」

あつぶねえ……

ノリで笑う所だった……！

セーフ！ ギリギリセーフ！！

「大丈夫だ、何でもない」

「そう？」

さて、うん。

どうしようかな。

第8話 暫間移動かめはめ波つて防ぎようなぐね？（前書き）

この小説、日間ランキングで一位になりまスター初めて一位になつたよ。

さて、今回はあんま進展ないです

如月くんが移動術覚えるへりー。

第8話 瞬間移動かめはめ波つて防ぎよづなぐね？

ピッ

俺は額に人差し指と中指を当てる、悟空の瞬間移動ポーズだ。

「うーん、なのはさんの戦闘力は……3くらい?」

別に瞬間移動しようとした訳じゃなく、ただ気を探つてみただけだつたりする。

「ひ、低い……！」

ガーンとショックを受けるなのはさん

「いやいや、なのはさん、悟空とかを基準に考えてるかもしないけど、よく考えるんだ、ラティッシュが初めて会った地球人のおつちやんがいただろ？」

あの大人であるおつちゃんでさえ戦闘力が5だつたんだ、3も十分だと思うよ」

まあ、スカウターがないから、俺の勘だけね

しかし赤ん坊の悟空の戦闘力が2つてことは赤ん坊にしちゃめっち

や強いつて事だよな。

といづか、何故俺がなのはさんの戦闘力を測つてているのかと言ひつと
あの能力バレした日から数日がたち、俺となのはさんとゴーノくん
は一緒にジュエルシード集めをしているんだが……

ふと、なのはさんが「私の戦闘力つて幾つくらいなんだろう」って
呟いたため、こんな状況になつていたと。

「なのはさんは気よりも魔力の方がデカいし、魔導師戦で戦闘力は
そんなに関係ないと思う」

「そつかー」

「なのはさんは気よりも魔力の方がデカいし、魔導師戦で戦闘力は
そんなに関係ないと思う」

その内一人がなのはさんの家にいるんだよな

完璧にあの人達だよね。

今思つたが、フェイトさんの氣を探ればどこにいるかわかるよね

「レンヤくん、レンヤくん」

「ん？」

なのはさんが何か期待したような眼差しで俺を見る。

え、なに？

「瞬間移動はできないの？」

……くつ！

ごめんよ、なのはさん……

流石に瞬間移動は……

しかし、わくわくした表情をしているなのはさんを見ると、出来る
んじやねって力が湧いてくるね。

「ちよ、ちよっと待つて！」

「あ、うん」

俺はなのはさんからは見えない位置まで移動する。

「わい……」

再び額に指を当て、なのはさんの気を特定する。

別に額に指を当てなくても気は探れるんだが、何か格好いいし。

「瞬間移動、瞬間移動……」

俺は今のはさんの喜ぶ顔がみたいがために瞬間移動を覚えようと
している……

なんだか、なんか複雑な気持ち。

まあいいや、集中集中……

正直じつやむか分からないけど……

頼むぞ、俺のチートボディ！

むむむむ……！

なのはさんの氣と俺の氣を合わせるかのよつこ……

なのはさんの氣を手繕り寄せるかのよつこ……

跳べ！

跳べよおおおおおー！

「ピシューーー！」

「え？ わつ！ レンヤくん！？」

「…………出来た？」

なんか、某鳳凰院みたいなテンションになつたら出来た。

「もしかして、今のが瞬間移動！？」
「す」「ーい！！」

「て、転移？」

なのはさんがはしゃぎ、コーコくんが驚く。

コーコくんいたんだね

「なのはさんのためにたつた今瞬間移動を覚えたよ」

流石チートボディ。

度々言つてゐるけど、悟空、本当に「じめん。

「え？ 私の、ため？」

「い、いや、何でもない」

「や、やつ」

なのはさんの顔がちょっと赤い。

ヤバい、何か主人公みたいな事してしまつた……！

しかし、コレで瞬間移動かめはめ波が出来るようになつたのかな。

ヤバいな、どんどん魔力の必要性がなくなつていく。

てか魔力より氣の方が効率いいんじゃないかと思えてきた。

第9話 ぶ、ブルータス！ ブルータスじゃないか！（前書き）

アンケート的な何かを取りたいと思います。

感想で魔力SSSもいらないって意見があつたので。

?魔力をSSSじゃなく、DかCくらいに落として、新たなチート
がなすりつけられる。

?そのままでいい。

よろしくお願ひします

第9話 ぶ、ブルータス！ ブルータスじゃないか！

皆さん、どうも、如月です。

今日はすずかさんの家に招待されたので来ています。

しかし、アレだ。

ハツキリ言って、女の子3人の中に男である俺がいる時点で結構気まずいのに、女の子の家に行く勇気なんぞ持ち合わせておりません。

なのに来ている理由は

止まつてました。

何がつて？

リムジン。

俺の家の前に。

わけがわからなことよ、と疑問に思つてこると、中からアコサセんが現れ

「あなたの事だからまた妙な理由つかうに来ないから追えに来てあげたわ！」

つて、胸張つて言われてしまい、断れなかつた。

やつこの詫び田村邸にお邪魔させて貰つた詫だが

「エハニツ事なの」

「「「「」」」」

何かまとわつむかれてゐるんだが……

「これはまあ、なんとこつか……

「うひの木」達みんな……

「ヘンヤバ付けてゐるの

何故？

「…」
「最近、煉夜くん、よく冗談を言つよつになつたよね

すずかさんが言つ。

まさか、俺は実は猫に好かれ安いのだろうか…

まあ、すずかさんの家の猫が人になれてるつてのもあるんだろうが

…

「そんなに懐かれてるんだから、撫でてあげなきことよ」

懐かれてるつてかじやれつかれてるつて感じもしないでもない。

しかし

「俺が撫でたらすずかさんちの猫はみんな俺の虜になつてしまつや
？」

「何言つてこのよバカ」

ひどい…

実は冗談じゃないんですよ……

それで、どうしたものか

と、考えだした瞬間

「フニヤアアアアーー！」

「　　ニヤツーー？」

一匹猫が飛び込んで来て、俺にまとわりついていた猫を追っ払う。

「こ、この猫は！？」

「あれ？　ここの子たちのネコじゃないよ？」

「どこのから紛れ込んできたのかしら？」

「ブルータス（猫）！　ブルータスじゃないか！」

「　　え？」

何故こんな所に……

「――ヤーン」

俺に飛び付いてくるブルータス

「お前、何で――元いるんだ?」

「――ヤーン――ヤーン、――ヤ――ヤーン、――ヤーン――」

「暇だつたから追い掛けで来た?

家から――元まで結構距離あるのによく来れたな

「――ヤーン・

「か、会話してる」

なのはさん達が驚いているが別に会話してる訳ではない。

ただそれっぽい事を言つてゐるんぢゃね?っていつ俺の勝手な解釈である。

でもブルータスを見るとあながち間違ひではないよつな気がする。

れて

「正直、俺は――元にてはいけなこよつな気がしてなりなんだが

俺にはガールズトークなんてぶつ潰してやる!ザ――。みたいな勇
気はないよ。

「気にはすんな」

「アリサさん……」

「そんな男前な事を……」

そんなキャラだつたつけ？

でもまあ、紅茶は美味しいし、お菓子も美味しいし、悪くはないよね。

猫撫でたいのに撫でれないのが残念だが

そんな感じで、三人の話を聞いて、時折相槌をうつたりしてのほほんと過ごしていた。

が。

「ー?」

なのはさんが驚いたように目を大きく開く。

『なのはー!』

『うん、すぐ近くだ』

ゴーノくんとののはせんが念話で話しだす。

そうだったな、ジュエルシードが近くにあるんだっけ。

《ビリヤニ》

ゴーノくんがなのはせんに問いつ。

《え、と……えーと……ー》

なのはせんはアコサセとすかせんを見て悩む。

《やうだーー》

「ゴーノくん？」

ゴーノくんがなのはせんの膝から飛び下り駆けていく。

「あららー。ゴーノビリヤニしたの?」

「うん、何か見つけたのかも、ちょっと探しに行くね」

「一緒に行こつか?」

すずかさんのが聞くが

「大丈夫、すぐ戻つてくるから待つてね」

なのはさんはそうじつて走つて行く。

『なのはさん、二人は俺に任せて』

『！ う、うん、ありがと、
念話出来たんだね』

散々念話を聞いてたからなんか感覚的に出来たよ。

「ユーノくんはなのはさんに任せて、俺達はドーラゴンボール談議で
もしよづか」

「なんですよ」

「あはは、『めんね、私よく知らないんだ』

「それはいけない、今度全42巻を貸そうか？」

「やめいー！」

アリサさんに止められました。

さて、やつこえせなのせあんとフロイトあんが初めて遭遇するんだ
つたつけ？

なのはせあんとフロイトあんの戦いには下手に首突つ込まないほうが
いいだろ？

アルフをそとは戦つたじね。

第10話 湯煙温泉……ポロリもあーねーよ(前書き)

アンケート結果。

?になりましたー

()

第10話 湯煙温泉……ポロリもあーねーよ

あの後、なのはさんはフエイトさんと無事遭遇したみたい。

アリサン達と話をしながら氣を探つて遭遇したのは分かつたけど、アルフさんの氣がなかつたなあ……

原作もこの時アルフさんになかつたんだっけ？

正直9年も原作を見ていないと、殆ど忘れてしまつんだが。

転生系の一次創作ってオリジナはすつと原作覚えてたりするけど、凄い記憶力だ。

もしかすると、記憶チートなのかもしれない。

まあ、それはそうと、しばらくして、フエイトさんの氣が離れて行き、なのはさんの氣が少し弱々しくなったため、アリサンさんとすずかさんにはなんやかんや言つて、迎えに言つてみると、地面に倒れているなのはさんを発見。

急いで連れて帰りました。

そして、やの田からなのはわんせフロイトさんの事で悩みだした。

と、言ひ訳で、温泉に来ました。

なのはわんに誘われたんですね

「お父さんとお兄ちゃんが是非おこでって」

……さて、界王拳の限界を超えてよつかな。

20倍かなあ、いや、30倍……

だがしかし、現実逃避しても意味がなかつた。

「いりなれば後は野となれ山となれ」

まづはみんな温泉に入るよつだ。

女子率高いよな、本當。

《レンヤー 助けてー!》

ん？　ユーノくんから念話が来た。

ユーノくんの方を見ると、女湯に連れて行かれてました。

……うらやましい。

だが、助けを求めているならば答えようか。

「なのはせさん」

「ん？　なーに？」

「ユーノくんブリーズ
手のひらを差し出しつづ。

「ダメよ、ユーノは私達と入るのよー。」

アリサさんに遮られました。

「ユーノくんは男だぞ？　！」は俺達と男湯だひつへ。

「ユーノは動物じゃない

「ですよねー」

『ええ！？』

「めぐ、ゴーノくん。

強く生きて。

『レンヤー！？ レンヤあああああ……』

連れてかれました。

「さて、煉夜くん
俺達も入るか」

ポンと俺の肩に手を置き、十穀さん

そして、その後ろには恭せさん。

詰んだ。

- - - - -

カボーン。

ふう、いい湯だ。

さて、上がるか。

「どこに行くんかい？ 煉夜くん、しつかり温まらないことダメでした。

引き止められたので、再び湯船につかる。

「さて、煉夜くん、ちょっとと聞きたい事があるんだけどねっ。」

士郎さんが言ひ。

「最近、なのはが……」

ガクブル

「キミの事をよく話すようになつたんだが、どうしてかな？」

！？

ば、バカな……！

士郎さんの気が膨れ上がった、だと？

「それに、最近キミとなのはは一緒にいる事が多いが……何をしているんだ？」

！？

そんなバカな……

恭也さんの気も膨れ上がった……

一人の氣がどんどん上がっていく……！

お、俺の界王拳10倍でも勝てるかどうか……

「あ、ああ……」

氣分はベジータ

も、もうダメだ、おしましだあ……

ブクブクブクブク……

「ん？ れ、煉夜くん？」

「た、大変だ、のぼせて氣を失つてるー！」

ベジータの気持ちがよく分かりました。

第1-1話 寝過ぎしはダメだよね（前書き）

わあて、壁にぶち当たつたわ……

英語のテストが10点未満を貫いて卒業した私に『バイスの台詞は難しそうね……！

まあ、普通に会話する分には日本語でいいよね。
ちなみにピシューと言つ効果音は瞬間移動した音ですよりしへ。

第1-1話 寝過ぎしはダメだよね

ん?

あれ、 いじは...

ああ、 そりか!

高町親子の戦闘力にあてられて氣を失ったんだった

ハハツ、 すげえ真っ暗

…… もつ、 夜じやん。

温泉の思い出が恐怖で震えた事つてどういう事だよ。
そして、 どうして俺は氣絶から睡眠に移行してたんだよー。

確かここにもジュエルシードあったよな?

そして、 フライトさんも来るんだよな?

完全に寝過ぎしてる気がしないでもないが……
ちよ、 ちよっとなのはさんの気を探つてみよつ

.....ん？

旅館の外にいるな、しかもフェイドさんの氣もある。

もしかして、バトル中？

ちょっと行ってみるか。

ピシュン！

- - - - -

場面が変わり、なのはVSフェイド。

月をバックに一人の魔法少女が戦っている。

『Thunder Smasher』

フェイトのバルディッシュから遠距離砲撃魔法が放たれる。

『Divine Buster』

それに応じ、なのはのレイジングハートからなのはの主砲、ディバインバスターが放たれる。

二つの砲撃がぶつかり合い、拮抗する。

「レイジングハート、お願ひ！」

『all right』

レイジングハートはなのはの言葉に応え、ディバインバスターの出力を増加させる。

その結果、なのはのディバインバスターがフェイトのサンダースマッシュヤーにうち勝つた。

「！」

「なのは……強い！」

ユーノが感嘆する。

「でも、甘いね」

そんなユーノにアルフが言う。

『Scythe Slash』

「なのは…！」

ユーノが叫ぶ。

「…？」

なのはが上を見上げると、バルティツシューをサイズフォームにしたフェイトが接近していた。

ピシューん！

瞬間移動でやつて来ると、上空でフェイトさんがなのはさんの首もとにサイズフォームのバルティッシュを突きつけた状態で止まつていた。

も、もう決着ついてるな……

これは正直、下手に動けない。

「レンヤー！」

背後からゴーノくんの声。

「ゴーノくん、すまない、大分遅れたよつだ」

「ちつ、新手……ってあんたはあの時のボウズ……！」

アルフさんが驚いている。

神龍騒動ですね。

「… レイジングハート… 何を… …… ー？」

なのはさんの方を見てみるとレイジングハートがジュエルシードをフェイトさんに差し出している所だった。

「主人思いのいい子だね」

フュイトさんはそう言い、ジュエルシードを手に入れ、地上に降りて来る。

「帰らう、アルフ」

「さつすがアタシの『主人様
じやあね、おチビちゃん！』

アルフさんが狼から人に変わり、フュイトさんと歩いて行く。

「待つて！」

だが、なのはさんが歩き去っていくフュイトさんを止める。

「名前……

あなたの名前は？」

「フュイト……フュイト・テスターッサ」

フュイトさんはなのはさんの問いに答え

「私は……！」

なのはさんの言葉を最後まで聞かず、飛び去って行った。

「…………」

なのはせんせフュイトさんが去つて行つた方を静かに見つめていた。

「なのはせんせフュイトさんはとほれつとまた近い内に会つてな
る。

元氣だして」

「…………うん、ありがと、レンヤくん」

れて、もし士郎さん達がなのはせんがいないのに気付いたら俺がわ
りとマジでヤバいので、そろそろ帰らつか。

「旅館に帰らつか。

瞬間移動するから俺に掴まつて」

「…………うん」

【以下、オマケと言つかボッ】

月をバックに一人の魔法少女が戦つている。

『Thunder Smasher』

フュイトのバルティッシュから遠距離砲撃魔法が放たれる。

『Divine Buster』

それに応じ、なのはのレイジングハートからなのはの主砲、ディバインバスターが放たれる。

一つの砲撃がぶつかり合う、と思つた瞬間。

ピシュン！

サンダースマッシュヤーとディバインバスターの射線上に煉夜が現れた。

「え？」

- ! ? -

ええええ！？

上から煉夜、フェイト、なのは。

チュドーン！！

「ヤバー——ん!?」

ちょっとふざけ過ぎたのでボツしました。

第12話 豆……？

「ニヤーニヤー」

ガリガリガリガリ

朝、ブルータスの鳴き声と何か削つてる音で目が覚めると。

枕元に……

「何だこれ」

何かあつた。

「箱……？ ブルータス、何これ？」

「ニヤー？」

さあ？ つて感じに首を傾げる、ブルータス。

ふむん、えーとなになに？

箱を手に取り、箱に書かれた文字を読む。

「×豆作りセット？」

つて書いているが……

何豆が分からん、豆の前に何か漢字があるんだが、ブルータスの爪痕で削れて読めねえ。

一体誰が置いたんだ？

誕生日つて訳でもないし、両親からのプレゼントとかならクリスマス以外は直接渡してくるだろ？

取りあえず箱を開けてみると。

「種と、何か少し青みがかつた液体」

セツトつて言つからにっぽい入つてんのかと思つたら一つだけって。

よし、ちょっと、植えてみようか。

- - - - -

だがしかし、今日は学校だつた。

学校から帰つてにしようか……

しかし、気になるんだが。

聞いてみるか……

「母さん」

「あら？ レンくん、どうしたの？」

初登場、俺の母親（26歳）。

ちなみに父親はもう仕事を行つてゐる。

「今日学校休んでもいいかな」

「どうして？ 具合悪い？」

「気になる事を追々求める年頃だからさ」

何言つてんだ、俺。

「…………」

母さんがジッと俺を見つめる。

「やつぱダメ？」

「やう、つか……

レンくんももうそんな年頃か……
う、いこ、学校はお母さんが電話してへね

何か、成長した息子を見て、嬉しそうな、どこか寂しいような、
そんな表情をして言う母さん。

何かノリいいな。

「え、てかズル休み、承認?」

「うん、でも今田だけだからね~」

「…………」

相変わらずのほほんとしてる人だな。

まあ、うん。

じゃ、ちょっと庭に行つて種を植えてみるかな。

- - - - -

とりあえず庭の隅の方に植えてみるかな。

「くく、この土ならいい豆が育つぜ」

「…………」

種を入れて、埋めて、謎の液体を垂らしてみる。
ポチャ、ポチャっと。

…………。

！？

もつ赤が出たーー！

一四キ一四キ一四キ一四キ……

凄い勢いで成長してゐる……

ふむ、莢豌豆みたいなのが出来たぞ。

とつあえず収穫。

莢に入つてゐ豆を一粒取り出してみる。

何か、既に完成した大豆っぽい豆が出て來た。

……「れつて、まさか……？」

いや、そんな馬鹿な。

……ちよつと、食べてみるか。

パクッヒ。

ドクン！

「ー? ハハ……」

な、何だ、力が湧いてくる……?

「、こわはやつぱり……」

や、やつせの箱!

箱を調べてみよ!」

部屋に戻り、種と液体の入っていた箱を調べると。

「ん? 手紙?」

手に取り読んで見ると……

【久し振りじやな、元気にしとるかの?】

最近、最高神(笑)と言われて軽くへこんでる最高神じやよ。

いやあ、数年振りにお主の事を天界から覗いてみたんじやが、ワシ
が与えた能力のせいで苦労しとるようじやの。

そのお説ぎと並つてはなんじゅが、お主に特製仙豆セサミトマト。

まあ、お主に与えた能力があれば、仙豆なんぞ別に必要なことじゅが、持つておいて損はないじゃん。

それでは、コレからも頑張つてくれ【れ】

じこわん……

こんなんより一コポとナナドポをどうとかじつてくれよーー

今でも十分チートなの、仙豆つて……

回復チートも追加されたーー

数に限りがあるチートではあるが……

ついと……

……あ、仙豆でいい事を思つてたや。

俺の思惑通りになるかは分からんが……

やつてみる価値はあるな。

第1-3話 瞬間移動の便利さは異常

ピッ

額に指を当て氣を探る。

誰の氣を探つているかといづと、プレシアさん

いや、仙豆を作りながらドラゴンボールの事を思い出してたら、悟空つて、地球から界王星に瞬間移動したり、天界から界王神界に瞬間移動してたから、プレシアさんの氣さえ見つかれば時の庭園に瞬間移動出来るんじゃね？って思つて。

だから探してんんだけど……

プレシアさんの氣を感じた事がないから分かんねえ。

飛びきりデカい氣とかなら分かるんだが、プレシアさんって氣は多分大きくないよね？

うーん、フヒイトさんに連れて行つてもひつ……いや、ダメだな。

敵もしくは邪魔者つて思われてそうだし……

「へん……

と、考えていると。

『レンヤくん?』

なのはさんから念話が来た。

ちゅうじびつべつした。

『どうかしたの? なのはさん』

『よかつた、元気そうだね』

『元気そう?……?』

ああ、そうか、今日学校休んだんだった。

『ズル休みだつたからね』

『ええ!? ズル休みだつたの!』

『いやあ、仙豆作つてて』

『仙豆!?』

なのはさんが驚いている。

まあ、デリケンボール知る方には仙豆ついてひとつもない物つて分か
つてゐだらうしなあ……

《レンヤくんつて仙豆も作れるんだ……》

《うーん、まあ、やつこつ事になるのかな?
数に限りはあるナゾ》

《す、スゴいね
あ、そうだ、私とユーノくん、これからジュヌルシードを探しに行
くけど、レンヤくんはどうする?》

そうだな……

《今回は俺、別の場所を探してみるよ
あ、見つかったら呼んで》

《うん、わかった!》

よし、それじゃ行つてみようか。

……全然見つからない

もう夜だぜ?

そりや、簡単には見つからないだらうけど。

あと、今日学校休んだから人が沢山いる所は探せないんだよな。

クラスメイトや先生に鉢合わせたら面倒くさいしね。

まあ、なのはさん、アリサさん、すずかさん以外の人達には俺空氣扱いだけね。

それに美少女三人と一緒にいるから敵意の眼差しを受ける事もあります。

あれ、目から汗が……

しかしまあ、相手は小学生だからね

あまり気にはしない。

ま、そんな事よりジュエルシードだな。

連絡もないし、なのはさんの方も見つからないのかな。

ふう、ジュエルシードにも気があればなあ……

……………あ。

そつだよ、ナメックの命に言葉を言いながら探したら見つかるんじやないの？

い、いや、いかん、頭の可哀想な子に見られてしまつ……

とこりかそれ以前にそれで見つかったら毎回神龍と戦わなきゃいけないじゃないか……

びひしたものか……

ピシヤーンー！

♪ロ'♪ロ'♪ロ'♪ロ'……

おおー？

雷ー？

まだ、今こ言葉は言つてないの♪ポルンガ（仮）出で始めたのかー！？

……って、違うようだ。

何だ？ 街の方に雷雲が……

まさか……！

ペシコーンー！

シゴシー

「レンヤくさん！」

「なのはなさん、これってもしかしなくても」

瞬間移動でなのはなさんの近くに来ると、ジュノルシードの光が空へと昇つてました。

「うそ、あの子もいるみたい」

《なのはー、ジュノルシードをあの子達よりも先に封印してー》

ゴーノくんの声が頭に響く。

《うん、わかったー！》

なのはなさんのレイジングハートに光が集まりジュノルシードに放とうとする。

が、それよりも一瞬早く遠くのフロイトさんのバルティックシユから黄色い光が放たれる。

「！！」

それを見てなのはさんが驚くが、すぐにレイジングハートからもジュエルシードへとピンクの光が放たれる。

距離的な問題もあって、二つの光はぼぼ同時にジュエルシードに当たった。

「リリカル、マジカル！！
ジュエルシード、シリアル19、封印！！」

その言葉と共に光が太くなり、ジュエルシードに当たる。

フェイトさんの方も同じように光が太くなっている。

二つの光がぶち当たり、何かスゴい無理矢理な感じがするけど、ジュエルシードは封印状態になり空中に留まっている。

「ま、まあなんだ……
わざわざ、取っちゃおう！」

俺は空中に浮かぶジュエルシードに手を伸ばす、が。

「やうはさせるかい！？」

その言葉と共に狼状態のアルフさんが思いつきり口を開けてこいつち

に飛びかかって来た。

「おわっ！－！」

ドスン！－

構図、巨大な狼にのしかかられてる俺。

.....。

「おわあああ！？ か、界王拳！－！」

「なっ！？」

界王拳を発動し、飛び退く。

「、怖え……」

狼状態のアルフさんって近くで見ると怖いんだよ！

「何だい？ 今のは？」

アルフさんが聞いてくる。

「界王拳だ、詳しくはドラゴンボールを読め」

あえて何巻かは教えない。

そもそも教えた所で、見ないだろうしね。

さて、フュイトさんも来たな……

よし。

ピシュー！

「あ……！？」

「なつ、速い！？」

俺は瞬間移動でフュイトさんの田の前に現れる。

流石にフュイトさんも驚いたみたいだな。

だがその驚きを待っていた！

驚きで少し開いたフュイトさんの口に、持つて来ていた仙豆を押し込む。

「んむ！？ う、んん！」

よじよし、ちよつと強引だが仙豆を飲ます事ができた。

「な、何を……！？」

フロイトさんが田を見開き、自分の手の平を見つめる。

「じゃあね」

身体の調子に驚くフロイトさんはいつ間にか、なはせなとの下へ戻る。

「ふう、仕事をやり遂げたって感じだ」

「れ、レンヤくん、何を飲ませたの？」

なのはさんのが困惑したように聞いてくる。

「ん？ 仙豆だよ」

「仙豆？」

きょとん、とするなのはさん。
いちいち可愛いな。

「うん、結構前から思つてたんだよね
フロイトさんの氣つて、常に弱々しいんだ。
栄養が取れてないというか、なんといつか。
だから仙豆を食べさせた。

正直、何も言わずに決行したのには反省している

「へ、ひひそ、それはいいけど」

「今回のあのジユノルシードはなはせなと任せると、フロイトさ

んと話したい事もあるんでしょ？」

「！ うん、分かった！」

ありがとう、レンヤくん」

さて、俺はユーノくんと一緒に傍観する事にしよう。アルフさんが二つちに攻撃してこない限り、だけど。

「あ、仙豆のせいで前よりパワーアップしてたら『ゴメンね』

「あ、あはは……」

流石のなのはさんもコレには苦笑い。

「 - - - - -
フェイト！ 大丈夫かい！？」

フェイトはアルフの言葉が耳に入っていないのか、手を握り締めたり、開いたりを繰り返している。

「フェイト？」

「力が、溢れてくるみたい……」

フェイトが呟く。

「え？」

「あの子が口に入れたモノを飲み込んだら、身体の疲れや痛みが全部なくなっちゃった……」

フェイ特はなのはと話す、煉夜を見つめながら言つ。

「ほ、本当かい？」

「うん」

「あ、アイツ、何でそんな事をしたんだろう」

「分かんない」

二人（一人と一匹?）は揃つて首を傾げるのだった。

第1-4話 時空管理局（前書き）

管理局登場なり。

第14話 時空管理局

ズドオオオオン！！

うわあ……

かめはめ波の比じゃねえくらいたかい光の柱が空に昇った。

フェイトさんとのはさんの戦闘は一人のデバイスがジュエルシードを間にかち合い、本気で壊れる5秒前というほどの罅が入り、そしてジュエルシードから凄まじい光が発せられた事により終了した。

フェイトさんの動きにキレがあったような気がしたがどうなんだろう。

仙豆が凄い効いたのかな？

しかし、なのはさんも大分強かつた、やはり、戦闘民族と言われてるあの親の遺伝はあるのか、魔法を最近始めたばかりなのに成長のスピードが速すぎるぜ。

「なのはー！」

ゴーノくんがなのはさんの方へ駆けて行く。

フェイトさんはバルティッシュを待機状態に戻し、あわついとか、

発動しかけているジュエルシードを素手で掴んだ。

「フェイトーー！」

「う……く……」

「フェイトーー！ダメだ！危ないーー！」

アルフさんが叫ぶ。

フェイトさんの手の中のジュエルシードは光を放ち、今にも発動しそうになるが

手袋が弾け飛んでも構わず、ジュエルシードを抑えつけ、フェイトさんはジュエルシードを封印した。

123

この世界の女の子達は俺なんかよりも心が強いです。

ジュエルシードを封印したフェイトさんは立ち上がるが足下がフラつき、倒れそうになる

「フェイトー！」

しかし、それを人型になったアルフさんが受け止め、フェイトさんを抱きかかえる。

そして、そのまま飛び去つて行った。

「あ……」

なのはさんはまだそれを見ているしか出来なかつた。

- - - - -

あの後、俺もなのはさんはそのまま家に帰りついた。

レイジングハートは自己修復機能で明日にはなおるようだ。

自己修復機能って、もはや地球の科学レベルを超えてるな。

それにしても、フロイトさんは手、大丈夫だろうか……

仙豆を渡しに行きたいが、そこまで空氣を読めない訳じゃないから
なあ……

仕方ない、今田はもう寝よう……

お休み～

「//ー」

ブルータス、お前いつの間にベッドの中へ……

チュンチュン……

もう朝かよ……

何か、眠れなかつた。

なんというか、気分が高ぶつていいというか、遠足前日みたいな……

とにかく眠れなかつた……

頭ダル……

そして、田に入るは仙豆。

。 。 。

カリッ

。 。 。

さて、今日も頑張ろうか。

・ ・

・ · · ·

おや？　ない……

探れど探れど、フロイトさんの気が見当たらぬ。

この街にいる筈なんだがな……

ああー、そうか、フロイトさんは時の庭園に行つたのか？

今日行く日だつたの？

しまつた、知つていたら無理矢理にでもついて行くんだった

そうだ……

今フロイトさんが時の庭園にいるつて事はフロイトさんの気が見つける事が出来れば、瞬間移動で行けるんじゃないかな？

早速、手当たり次第に探つてみよっ……

結論からいひつとじだ。

ダメでした。

フュイトさんの気は見つからなかつた。

くつ、折角母さんに無理言つてまた学校休ませて貰つたのに！

まあ母さん自体はスゲニコニコしてたが、それ程気にはしないみたいね。

いつもニコニコしてる母。

いつも無表情な俺。

これアレだな、銀髪オッドアイってのもあって確実に親子に見られないだろうな……

ま、まあそれはいいとして、フュイトさんだよ。

俺に悟空並みの氣を探る力があれば時の庭園にいるフュイトさんを見つける事が出来るかもしけないが、今は無理だ。

時の庭園に一回でも入る事が出来ればなあ
瞬間移動が可能かもしれん。

何このルーラ。

まあ、今はそんな事を言つても仕方ない。

ずっと気を探るのに集中してたからなあ……

気分転換に散歩にでも行く事にするか。

で

『オオオオオ……ー!』

いりなると。

まさか散歩に出て公園に言ひてみたらじんめんじゅみたいな樹の化物に襲われるっていうね。

ジユーハルシードが見つかって運がいいのか、悪いのか。

『オオオオオー!』

超怖え

一応なのはさんこ念話を送つたが……

来るまで向とかしないとな。

とつあえず適当に氣弾を撃つてみる。

キンッ！

え？ 鋼体？

い、いや、バリアか……

今までのとはひと味違つ感じがするぞ

ジュエルシードもそろそろ本氣出してきたようだ。

『オオオオオオオオオオオオ！』

じんめんじゅ（仮）から太い根が伸び、俺へと迫る。

「残念だつたな！ 舞空術だ！」

迫りくる根を空に飛んで避ける。

バキバキバキ！！

ドシユツ！！

……根が90度くらい直角に曲がって空にいる俺に突っ込んで来てるんだが。

ハハツ、対空攻撃とか。

「さ、3倍！－！」

界王拳を発動し、避ける。

避けたと安心しちゃダメって事がよく分かりました。

《才才才才才才才才才才！！》

じんめんじゅ（仮）が叫び根の数が増え、さらに迫つて来る。

とうとう、あれを使う時が来たよつだな……

俺は手の平に氣弾を作り出し、その氣弾を薄一ぐ
鋭利に伸ばして行く。

「行くぞ、氣円斬！！」

迫り来る根に向かい、投げつける。

ザンツ！

見事に根が斬れた。

さすが氣田斬。

クリリンの作つた技の中でピカイチだな

「もつこつちゅー 気田……連斬……！」

ビシューシューシューシュー！

『氣円斬を両手で連続で繰り出す。

『氣円斬は迫る根を全て斬り刻んで行く。

『オオオオオオオオ……！』

よし、怯んだ隙に！

「か、め、は、め……」

ピシュン！

「波あ……」

わざわざ、瞬間移動でじんめんじゅ（仮）の背後に回りかめはめ波を放つ。

一回やつて見たかったんだ。

『オオオオオオオオオオオオ……！』

・・・・・・・

…………さて、何かなのはさん達が来る前に倒せりやつた訳だが。

ジユエルシードって強い力当てたり封印出来ちゃうのかな？

もう、封印状態になってるんだが。

ふーむ。

キラン

「ん？」

ズドン！

「うおあー!?」

何か飛んで来た！
ま、魔力弾か？

「ジユエルシードを渡して」

フェイトさん降臨。

バルティッシュ、サイズフォームの先端に形成された光刃が放たれる。

え、ちょ……！

『Protection』

ガキン！

「大丈夫？ レンヤくん！」

なのはさんも降臨！

なのはさんはさんがヒーローみたいな登場の仕方をしたんだけど。
マジかっけえ。

「封時結界、展開！！」

ユーノくんが結界を展開する。

そういうや、俺が単独で戦う時、結界とか貼れないから下手したらバ
レるな……

今まで一般の方にバレなかつたのは運が良かつたとしか言いようが
ないといつ。

「邪魔をしないで」

「私は、フュイトちゃんと話しがしたいだけなんだけどな」

フュイトさんとのはさんが一触即発な状態になる。

「邪魔をするなら……」

『Device form』

フュイトさんがバルティッシュを構える。

「フュイトちゃん、もし私が勝つたら、お話し、聞かせてくれるかな？」

『Device mode』

なのはさんもレイジングハートを構える。

…………どうしよう、こきなり過ぎてついて行けない。

二人が同時に飛び出し、打ち合つ、かと思つた瞬間。

ドシュウウウウ！

空に魔法陣が浮かび上がり……

「ストップだー！」

誰かいた。

「「ー?」」

「『』での戦闘は危険すぎるー。」

あれは……
そうか！

「時空管理局、執務官、クロノ・ハラオウンだ！
詳しい事情を聞かせて貰おうか」

クロノくん、クロノくんじゃないか！

顔を見れば男って分かるけど、声だけ聞いたら、あれ？ 女の子？
つて思うくらい、14歳にしては幼いボイスをしているクロノじゃないか！！

「何がけなされている気がする……」

主人公紹介2

【如月 煉夜】
きさらぎ れんや

知つての通り主人公。

オッドアイであり、右目が緑、左目が紫である。

界王拳や気の使用は何も問題なく行えるが、SSS級もの魔力を一度も使った事がない。

SSSという凄まじいものなのだが、気が便利すぎて本人すらその存在を忘れる事がある。

ずっと気だけを練習していたため、自分でも知らないうちにリンクアに気の膜を張つており魔力が微妙にか出せない状態になつている。

が、これを聞いても本人は別に気にしないだうし、気の膜自体もすぐに取り外せるものである。

【如月くん所持品】

「仙豆」

言わざと知れた、超回復力を持つ豆。

そんなに美味しいわけではない。

もう数秒後に死んでしまつような傷を負ってしまったとしても一粒食べると一瞬で全快する。

傷を治す他にも疲労回復や10日間何も食べなくともいい程の栄養が取れる。

しかし、病気には効かない。

「ジュエルシード」

なんやかんやでちゃつかり所持している、願い保留ポルンガ（仮）がいるジュエルシード。

願いは考え中。

分かつていろとは思つが、如月くんは基本的、無表情。

だがようは笑わなければ言い訳で驚き叫んでる時は驚いた表情をしているし、恐怖（主に高町親子の威圧）に染まる時は泣きそうな表情をしたりもする。

第15話 アースラ（前書き）

書いてる途中で眠つて、何かよく分からなくなつた。

第15話 アースラ

「時空管理局？」

ユーノくんが呟く。

とつとう来たな。

正直今日来る事なんて忘れてた。

「まずは一人共武器を引くんだ。
このまま戦闘行為を続けるなら……」

クロノくんが降りて来る。

「…？」

ズドオオオン！！

「フュイト！ 撤退するよ、離れて！！」

アルフさんがクロノくんに向かって魔力弾を発射する。

「……！」

フェイトさんは着弾する魔力弾の爆風と共に飛び出し、アルフさん

と一緒に逃走する。

「待て……」

クロノくんが逃げるフロイトさん達に、バイクを向け、魔力弾を放とつとする。

「何してんだ」

スパン！

「あつーーー？」

俺はクロノくんの頭をはたき、魔法の使用を止める。

「うわー、管理局員を叩くなんて度胸あるなあ」

ユーノくんが言つ。

え、まずかつた！？

俺、捕まる！？

捕まっちゃう！？

「な、何をする……」

「な、何をつて、う、んん！！ ゴホン。

背後から傷だらけの女の子を狙っていたから止めただけだ

フヨイトさんの氣が仙豆を無理矢理食べやむる前よりも弱々しくなつてたんだよな。

手の怪我もあるだりうし、心配だ。

仙豆を渡したい。

「傷だらけ……？」

フヨイトちゃん、怪我したのー？」

なのはさんがあいつ。

「うん、多分

大分参つてる筈なんだが、精神力が強いんだな」

いや、精神力というより、プレシアさんを悲しませたくないって思
いが体を動かしていいのかも知れない。

「フヨイトちゃん……」

心配やうなのはさん。

「ど、とにかく君が持つてこるロストロギアを渡すんだ」

と、クロノくん。

「ロストロギア……」

ああ、コレか

俺はジュエルシードを“一個”取り出しきロノくんに渡す。

そこで

『クロノ、お疲れ様』

空中に映像が映し出され、映っている女性がそりゃひ。

リンディさんじゃないか……

「すいません、片方は逃がしてしまいました」

俺の方をチラツと見ながら言ひクロノくん。

れて、何のじとせいか。

『んー、ま、大丈夫よ

それでね、ちょっと話しが聞きた以為から、そつちの子達をアースラ
に案内してあげてくれるかしら?』

「了解です、すぐに戻ります」

アースラか……

さて……

「帰るか」

ピッヒと額に指を置き、瞬間移動のポーズをとる。

「ええ！？ 帰つひやうの！？」

すまない、俺にはリンクティ茶を飲む勇気がないんだつ！！

「うう、一緒に行こうよ」

と、なのはさんはがく。

俺の服の袖をキュッと掴んで。

不安そうな表情で。

若干上目使いで。

「大丈夫だ、問題ない。
行こうか」

なのはさんは魔性の女だったようです。

いつの田か同じような事を言つた気がする。

「なのは、僕もいるんだよ……」

すまない、ユーノくん、忘れていた。

- - - - - 【アースラ内部】

とうとうやって来たぜ、アースラ。

宇宙戦艦みたいで格好いいな。

「なのはさん、探検しよう
フリー・ザ様がいるかも知れない」

「た、楽しそうだけば、今はやめよ?」

あと、フリー・ザ様がいたら恐いよ……」

ホッホッホ!! 見てくださいザーボンさん、魔法少女ですよ!

いかん、思いの他テンションが……

落ち着け、俺。

「探検はさせないし、そんな妙な奴もここのせいない」

クロノくんがふたり並んで立つ。

いずれクロノくんもドラゴンボールの虜にしてやる。

・ · · · ·

ユーノくんによる時空管理局の説明を聞きながらまじめ歩くと

「ああ、何時までもその格好といつのも窮屈だり、バリアジャケツ
ツトヒテバイスは解除して平氣だよ」

とクロノくんがなのはれとに囁く。

「あ、そつか、そつですね、それじやあ……」

やつにはなのはれとはバリアジャケツを解除する。

「君も、元の姿に戻つてもいいんじゃないか?」

クロノくんがなのはれとの足元に立るクロノくんに囁く。

.....?

「ああ、やつにはなのはれとは、そつですね

ずつヒヒの姿でいたから忘れてました」

ああ、そつか、クロノくんつてフューレットじゃないんだった。

「?」

なのはれんが何を囁いてるのか分からないのか、きよとんとしている。

そして、クロノくんが発光する。

クロノくんは黙の子になつた。

「あ、ああ、ふ、ふえええ！？」

なのはさんがすげえ驚いている。

「？ なのは？」

「ゆ、ユーノくんて、ユーノくんて、あ、あのその、ええええ！？」

「なのはさん、少し落ち着こうか
深呼吸しよう」

「う、うん、すーはー、すーはー」

なのはさんがあくびと深呼吸をする。

「僕の本当の姿見せた事なかつたつけ？」

「ねえよ」

あれ？ と尋ねているユーノくん。

「正直、ユーノくんが人間だつたとかは別にどうでもいいんだ、だが一つ聞きたい」

俺はユーノくんの肩に手を置き、

「何？ レンヤ」

不思議そうな顔をしているユーノくん

「温泉は楽しかったか？」

「…？」

俺の言葉にゴーノくんはビクッとする。

「俺が士郎さんと恭也さんに挟まれてベジータつてる時にゴーノくん、君は男にとつての全て遠き理想郷でお楽しみだったと、そういうわけだな?」

「ほ、僕は、みんなの裸は見ていない…！」

首を振りながらゴーノくん。

「誓ひつか?」

「う、誓ひつか?」

そうが、見てないのか、よかつたよかつた。

「でもなのはせんの下着姿とかは何回も見てるよな?」

「…、そ、そんな訳……」

「ゴーノくんの気に乱れを感じる」

「いめんなさい」

正直に謝ったのは驚めよ!。

しかし

「羨ましい」

全く羨ましいなあ！

「え？ レンヤくん、う、羨ましいって…………？」

聞かれてた……

「な、何でもない、忘れて」

「う、うん」

だから、何故こんな主人公みたいな事を…………！

「んん！ もう、いいか？」

クロノくんが咳払いをし、そう言ひ。

「君達の事情は知らないが、艦長を待たせているので出来れば早めに話を聞きたいのだが」

「あ、はい」

「すみません」

「子供の内からそんな真面目だと、ハゲるぞ」

ピキッ！

クロノくんの「ぬかみに自管が浮き出る。

「あ、君は……！」

フルフルと僅かに震えるクロノくん。

「あ、あわわ！

レンヤくん！ そんな事言つやが駄目だよ。 謝りなれやー。」

「！」みんなさー

「へ、へ……

ま、まあこいだれひ！」

「なのはの言ひ事、素直に聞くなあ……」

「艦内の一室に入ると

艦内の一室に入ると

「ねむ……」

盆栽や鹿威しがある、外国人が日本にかぶれてテンションの赴くままにつくらひつたところのような和風な部屋だった。

何回か日本に来た事があるんだろうか。

「お疲れ様、まあ、三人共、ビーフリビーフを、樂にして、逆に樂に出
来ない空間なんだだけね、」

「なるほど、そうですか
あのロストローギア、ジュノルシーードを発掘したのはアナタだったん
ですね」

リンティさんがユーノくんに囁く。

「それで、僕が回収しようと」

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある

「…………」

しゅんとするユーノくん。

「あの、ロストローギアってなんなんですか？」

なのはせんが聞く。

ロストローギアって、ロストロ、ギア？ ロスト、ロギア？

「ああ、遺失世界の遺産……って言つても分からぬわね

えつと

と、リンディさんが親切にもロストロギアの説明をしてくれているので、出されたお茶を飲みながら聞く。

……普通に飲んじまつたが、普通のお茶だつた。

断じて甘く無かつた。

まあ、流石に初対面でいきなり自分と同じ量の砂糖を入れたりはないか。

それにしても、俺がここにいる理由つてあんまり無いような気がする。

カゴーン

「たつた一つのジュエルシードの全威力の何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ、複数個集まつた時の影響は計り知れない」

ジュエルシードってやつぱり恐ろしい物なんだな。

たつた一個でポルンガ（仮）が出て来た理由が分かつたぜ。

「聞いた事があります。

旧暦の462年、次元断層が起こつた時の事」

「ああ、あれは酷いものだつた

嫌な、事件だつたね……

じゃなくて、もはや何の話をしているのか分からなくなつてきた。

「繰り返しあやいけないわ……」

と、リンディさんが神妙な顔で言い、お茶に角砂糖を入れた。

「あ……」

なのはさんが驚いて小さく声を上げた。

お茶と砂糖つて相性いいんだろうか……

「これより、ロストロギア、ジュエルシードの回収についてでは時空管理局が全権を持ちます」

リンディさんが言つ。

「え」「

俺を除いた一人が驚く。

ヤバい、もはやかすれてきているとは言え、原作知識をそれなりに持つてる俺としては、色々と驚けない。

「君達は今回の事を忘れて、それぞれの世界へ戻つて、元通りに暮らすといい

「でも、そんな」

「次元干渉に関わる事件だ、民間人に介入して貰うレベルの話じゃ
ない」

クロノくんが言い放つ。

「でも…」

なのはさんは納得いってないみたいだね

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょ、今夜一晩
よく考えて、それから改めてお話ししましょ」

そう、リンクティさんが締め括り、お開きになつた。

- - - - -

お開きになつた筈なんだがなあ。

「じめんなさいね、あなただけ残つて貰つて、すぐ終わるから」

なのはさんとユーノくんは一足先に帰りました。

「さて、聞きたいのだけれど、あなたが使つた力、あれは一体何か
しら？」

モニターに映し出されるは、俺とじんめんじゅ（仮）の戦闘。

あ、撮られてたのね。

俺がここにいる理由が一気に出てきたな……

……どう説明すればいいの？

第1-6話 気（前書き）

能力バレたなう

第16話 気

「俺の力ですか」

「そり、良ければ教えてくれない?」

俺の力……

ふむ。

「氣です」

「キ?」

「そり、氣」

「…………」

「…………」

「…………」

「え? それだけ!?」

そんな驚いた表情をされても……

「氣は氣としか言いよづがない」

「キつて言つのがそもそも何なのか分からんだけど……」

そこからだつたか……

仕方ない。

「ちよつと待つて下さい」

ピシュン！

「え？」

「なつ！？ 消え……」

ピシュン！

「ただいま」

驚いているリンクティさんとクロノくん。

…………あ、クロノくんいたんだ。

「い、今のは？」

「瞬間移動です」

「瞬間移動？」

「そう、瞬間移動」

「…………」

「…………」

「…………。」

「だからそれだけか！？」

「だつて、瞬間移動は瞬間移動としか言わざるを得ないじゃないか」

「ま、まあ、あなたの力が凄い事は分かったけど、それは何？」

リンディイさんが俺が持つてゐる袋を見ながら囁つ。

「ああ、これは今、瞬間移動で俺たちの部屋に行つて取つて來た……」

「袋の中身を取り出しへ

「『グラゴンボール（全42巻）』です」

リンディイさんに渡す。

「もはや、どこからシッ『めざここの……』

何か微妙な顔になつてくるリンディイさん。

まあ、とにかく

「それを読めば気が何か分かるー。」

「僕達は漫画を読む暇など……」

クロノくんがそんな事を言ひ。

「口で説明してもここナビ……」

「ナビ?」

「正直めんどくさい」

ピキッ

クロノくんのこみに血管が浮き出る。

クロノくん、怒りっぽいな。

「それじゃあ、これ以上クロノくんを怒らせたらどうなるか分から
ないので、俺はそろそろ帰ります

俺の気についてはそれを読めば本気で分かつますよ、それじゃあ」

ピシューー

「え、あー、一回ひとと書きしさうと行っちゃったわ……

……ひとつ、読んでみようかしら」

「艦長ー。」

-----【皿モ】-----

かく、どうしようかな。

ねむりくなのはせめては管理局に協力するだらうからなあ……

よし、俺も協力しようか。

もうと決まれば母さんに相談しよう。

「母さん…」

バーン！

「あらあら、やがてしたのレンくん？」

「実は、相談があるんだ」

「じつめらしく振舞わせやつたりするかも~って~」

「なん……だと?」

な、何故分かつたんだ……!?

母さんは一コータイプだったのか……?

「お母さんは何でも知ってるんだよ?

レンくんがかいおつけーん!って赤いのになれるのも

そ、そんな……

いつの間にバレてたんだ……！？

「ちよつと前にレンくんが出掛けた時、暇だったから後をつけていつたら見ちゃった」

見ちゃった

じゅ、ねえよ！？

ええ～、もう既にバレてたとか、考えてなかつたよ……

「お母さんほんへんがしたい事をすればここと連つぶや～

「か、母さん……」

何て話の分かる母なんだ……

前世ほんなんじやなかつたぞ……！

「学校ほんまのがなんとか言つておくからね」

「あつがとひ、母さん

……あ、すっかり忘れてたんだけど、父さんほんま。

「ああ、お父さんほんま出張でじょへ帰つて来なこよ

父さん……

最近見ない（とこりか普段からやんに見かけないけど）と思つたら出張つて……

「あ、ああ、いこや

それじや、行つてくろよ」

「わい行くの？ わ井戸持つてこへ？」

「こや、ここや

「あら、わう？ われじや、行つてひりしおこ

相変わりず、一ノ口一ノ口してくる母だぜ。

母さんが一ノ口持つてたら大変な事になるな……

母さんと結婚した父さんはある意味一ノ口されたと言つても過言ではないかもしれない。

よし、じやあ、行くかな……

「じやあ、母さん

行つておまき

「お土産買つて来てね~

お、お土産……

アースワットのお土産売つてんのかな……？

- - - - -

シユツ

「こんばんわ」

「！！あ、あら、びっくりしたわ」

瞬間移動したら、リングディさんがドラゴンボール読んでた。

しかも21巻、あの短時間ですげえ読んでる。

第17話 六つのジュエルシード（前書き）

……なんか不完全燃焼みたいな？

今回なんか、自分で書いたのに気にくわない

が、更新する。

妥協も大事だよ、うん（あ

第17話 六つのジュエルシード

れて……

俺となのはさんとコーノくんがアースラに来てから結構たつた。

その間にジュエルシードを三つ手に入れ、一つフェイトさんに奪わ
れて行きました。

ジュエルシードはあと六つらしい。

でも、俺がさり気なく所持してるジュエルシードはまだバレてない
から、あと五つ？

いや、もしかしたらこのジュエルシードはフォイトさんが所持する
筈だった奴なのかもしれない。

ならばやはり後、六つ？

うーん、わかんねえ、まあ何とかなるさ。

あ、ちなみに氣の事についての説明だが、クロノくんにすげえ危険
視されました。

読んだのか、クロノくん？

安心してくれ、今の俺じゃ10倍界王拳かめはめ波を地上に向けて

撃つてもちよつとヒカルをくらしか出来んから。

10倍界王拳でもラディッシュと戦う前の悟空より弱いし、多分。

まあ、とにかくコンティナは「悟空の真似してたら出来るようになつた」と説明した。

- - - - -

ウー、ウー。

ん？ 何だ？ 警報？

「Hマークジョンシー、搜索域の海上にて大型の魔力反応を感知！」

ついに来たか……

モニターに映る、フロイトさんを見る。

あ、俺、さつきまでクロノくんに雑用をやらされてました。

何でだらり、クロノくんの俺の扱いがなのはさん達と大分違つんだ
が……

「何とも、呆れた無茶をする子だわ」

「無謀ですね、間違いなく、自滅します」

クロノくんつてよく“無謀”つて言つよね。

よく考えるとや、 “無謀” ってそういう言わないよね。

“無茶”とか“馬鹿な事”とかでもいいこと黙りつこだ。

「フハイタツヤんー。」

なのはせんが走つて来る。

「あの、私、急いで現場にー。」

「やの必要はなこと、せつておけばあの子は自滅する

なのはせんの言葉にそれ返すクロノくん。

「ー。」

「仮に自滅しなかつたとしても、力を使い果たした所で呪けばいい」

……時空管理団つて、警察みたいなもんだよな？

クロノくんの言葉が警察のものとは思えないんだが。

「クロノくん」

「？ なんだ？」

「スパンー！」

「うあーーー？」

取りあえず、クロノくんの頭を何故があつたスリッパではたいて

『なのはさん、そしてユーノくん』

念話を送る。

『！レンヤくん？』

『今から、瞬間移動でフェイトさんの所に連れて行ってあげる』

『ほんと！？』

『うん、だから一人とも俺に拘まつて』

『うん！』

『分かつた！』

なのはさんとユーノくんが俺の肩に手を置く。

『いきなり空に投げ出されるから気をつけたまへ』

『うん！』

「リングディさん、クロノくん
ごめんなさい、命令違反する」

そつ言い、額に指を当て、フェイトさんの気を特定する。

「な、なに！？ 待つ

なのはさん達はフュイトさんの所に送り、なのはさん達はフュイトさん、アルフさんと協力してジュエルシードを封印しようとしている。

俺？ 俺は傍観している。

今回ばかりは俺に出来る事がないんだよ……

六つのジュエルシードを強制封印出来るくらいの威力がある攻撃が無いんだ、一つ一つ封印するにしても不安定な状態だから何が起こるかわからんねえし……

出来て、少しジュエルシードを抑えるくらいか……

魔法が使えないからなあ……

魔法も覚えるべきだろ?つか……。

いや……

・ · ·

ユーノくんとアルフさんが魔力の鎖でジュエルシードを抑えている。

だが相当キツそうだ。

やつぱり……

「ユーノくん、アルフさん、俺も出来る限り手伝う事にする

「レンヤー！」

ユーノくんとアルフさんに並ぶ。

「やつた事ないけど……

頼むぞチートボディ！」

かめはめ波のポーズを取り

「10倍界王拳の、超かめはめ波だ！」

全身の気を手の平に集中させ

「か、め、は、め……」

解き放つ。

「波あああーー！」

通常よりも太いかめはめ波がジュエルシードに向かう、そして

「分かれる！」

かめはめ波が六つに拡散し、それぞれのジュエルシードに直撃する。

すげえ、ぶつけで出来た。

「す、凄い！ ジュエルシードの力がかなり弱まつた！
これならこけるよ、なのは…！」

「うん！ 行くよ、フェイトちゃん！」

なのはさんはフェイトさんの足下に巨大な魔法陣が現れる。

そして、なのはさんの『ハイバインバスター』とフェイトさんのサンダーレイジがジュエルシードに放たれた。

第1-8話　雷にぶち当たるの痛い……（前書き）

今回なんか微妙な所で終わってしまった……

次回辺りから如月くんがオリ主っぽい事をする……かな。

第18話 雷にぶち当たるの痛い……

結果は見事に六つまとめて封印する事が出来た。

が。

ドガアアアアン！！

「！？」

突然雷の音が轟き、海へと落ちる。

「！？ か、母さん？」

フェイドが空を見上げ、恐怖の表情で呟く。

そして、再び轟音と共に、雷が落ち

フェイドに直撃する

「うああああー！？」

かと思われた。

「……え？」

フロイトの田の前には、雷に打たれ、焼け焦げた煉夜がいた……

そして、煉夜はゆづくと海にて

ドボーン――

落ちて行った。

「れ、レンヤくん――！」

なのはの悲鳴が辺りに響き渡った……

――――――――――――――――

ゴボ、ゴボ、ゴボ、ゴボ、

ゴボ、ゴボ、

ゴボ、

。。

バシュウカウカウカ――――

カリッ

ザッパーんー！

「復活ーー！」

スッゴい、痛かった！

「え？」

なのはさんがハトが豆鉄砲くらつたような顔をしている。

「なのはさん、何か忘れてないか？

俺には仙豆と言つ反則的な道具があるんだぞ？」

なのはさんに向けて、仙豆の入った袋を見せる。

「あ……」

そういえば、といふよくな顔をするなのはさん。

しかし、本当に痛かったよ。

10倍界王拳を使ってたからまだよかつたものの、もし界王拳を使つてなかつたら死んでたかもしれない、割とガチで。

俺、バリアジャケットを着てるわけじゃないしそ。

二次創作だと、あの雷を受けるオリ主達がいるけど、凄い勇気だ。

俺なんて10倍にしてるから大丈夫だつて思つて受けたんだけどなあ……

でも、フェイトさんに雷が落とされると分かつてて、ただ見ているだけ何て出来ないしなあ……

みんなより強い力を持つている分、余計に。

しかし、プレシアさんの魔法の威力。

そして、それをフェイトさんに向けるといつ非道か。

でも、原作だとフェイトさんはアレを受けても大丈夫だったから、非殺傷設定ではあったのか？

手加減してくれていたのか、いないのか、微妙な感じでわからんねえ……

ガキイイイン！！

と、そこまで考えていたら、いきなり何かがぶつかり合ったような音が聞こえた。

音の方を見てみると

「ちー！」

アルフさんの拳を受け止めている、クロノくんがいた。

いつの間に……

そして、アルフさんはクロノくんを弾き飛ばし、三つのジュエルシ

ードを奪い

「フロイトー 遠くよー。」

「え、あ、う、うんー。」

魔力弾を海に呪きつけ田畠ましをし、フロイトさんと逃げて行った。

ちなみに残りのジュエルシー三つはクロノくんが回収しました。

うーん。

ここは敢えて追いかけない事にしよう。

- - - - -

アースラに戻り

「指示や命令を守るのは、個人のみならず集団を守るためのルールです。

勝手な判断や行動が貴方達だけでなく周囲の人達をも危険に巻き込んだかも知れないとこうこと、それは分かりますね？」

リンディさんに怒られます。

うーん、俺はちょっと考えたい事があるから、取りあえず話半分に聞いといつ。

さて、これからどうするか……

今まで原作沿いに事を運んで來ていたが、そろそろ勝負に出てみる

のがいいかもしない。

しかし、そのためにはフレシアさんのこと、時の庭園に行かなければならぬ。

どうしたものか……

「……ただし、一度はあつませんよ、分かりましたね？」

「は、はい。」

「…………」

「レンヤくさん？」

「え？ あー、はい。」

ヤバい、話半分所か全く聞いて無かつた。

その後、黒幕がフレシアさんだと判明し、エイミーさんにフレシアさんの事についての話を聞いた後、俺達は休暇っぽいのを貰い、久し振りに家に帰つて來た。

あ、ちなみにリンディさんに仙豆の事を聞かれたから、一粒渡してきた。

仙豆つて一体どう風になつてゐるのか調べてみるらしい。

「レンちゃん、お土産は？」

「アレ、本気で言つてたのか……」

帰つてやつぱり、母さんがそんな事を言つた。

え、えーと、お土産……

あ！

「アースラの食堂で貰つたクッキーならあるが
「クッキーかあ、じや、紅茶入れるから一緒に食べよつか」

そつこ、母さんはキッチンに行く。

そういえば、今リンティさんはなはなにいるみたいだが、俺
んちにも来たりすんのか？

なんだかんだで母さんに色々バレてるから別に来なくともいい気が
する……

「はーい、紅茶淹れたよ」

母さんが戻つて來た。

つて、そつこえば

「お父さん、父さんは？」

「お父さん、お父さんは海外に出張中だからまだ帰って来ないよ？」

父さああん！！

出張つて海外かよおおおー？

出張つか、父さんだけ転勤してんじゃないかといつ。

父さんの存在感が薄すぎで、俺の父さんは実はいないんじゃないかなと思えてきた。

「レンくん、今田と明日へりこまへるんでしょ？」

「ん？ うん、多分こむと思つけば」

「じゃ、レンくんが休んでる間の授業のノート渡すから、しつかり予習してね」

なん……だと……

10日以上休んでるから、ノートが凄い事に。

転生した身としては小学校の授業とか余裕なんだが……
まあ、やつとくか。

「二人揃つて休んで、二人揃つて登校つて、アンタ達一人で何かしてたの？」

今日は久し振りの学校。

久し振りに四人揃つた気がする。

「べ、別にそんな事ないよ？」

「そうだな、俺はちょっとした家の事情だよ
俺の方が休んでる期間長かつただろ。
今日は偶然一人揃つて登校しただけだよ」

そういう事にしておこう。

「ふうん、ま、でも、元気そうでよかつたわ」

何かちょっと疑わしげな表情をしてるアリサさん。

ははは……

・・・・・

「今日の放課後、一緒に遊べるかな？」

すずかさんが言つ。

「うん、大丈夫！」

「じゃあ、うちに来る？ 新しいゲームもあるし」

新しいゲームか……

気になる、が

「俺は参加出来ないから悪しからず」

ちゅうと、やる」とが。

「何でよ？」

何でって言われても……

「また適当な理由つける気じゃ……」

「そんな事をしても無意味だといつ事を理解しているから、変な理由付けはしない。

ただ今田はやることがあるだけだから」

「そつか、残念、レンヤくんとも久し振りに遊びたかったんだけど

すずかさんが優しすぎて笑えない自分がつらい。

『というわけでそつちは任せた』

『え、う、うん……？』

なのはせんは何かよく分かつてないみたいだが、まあいいか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0830y/>

テンプレートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話

2011年11月9日20時10分発行